

サビエル生誕五百年



巡礼の道

171

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

## 貧しさの中の輝き

今回のカンボジア訪問はカンボジアなどの貧しい人たちを支援しているバツタンバン友の会（事務局・広島祇園教会）のスタディ・ツアーに同行したものだ。

スタディ・ツアーは援助する側と援助される側が交わり、そこから何かを学ぶ旅とでもいうものだろう。旅を振り返って「豊かさとは、貧しさとは何か」を考えさせられる。

帰国後すぐ十三団体参加の「NGOネットワーク山口」主催のベトナムへのスタディ・ツアーにも参加した。昨秋の北タイのモン族、今春のフィリピン・ルソン島北部の山岳民族訪問も支援先を訪ねるスタディ・ツアーだった。

自分の衣食住で不足に思うことはない。しかし何か貧しさを感じる。高度成長で物質的には豊かになったのに、心の貧しさがたびたび指摘されるのはなぜだろうか。まして自殺者が年間三万人を超えるのは何に原因があるのだろうか。

これら訪問した国々は確かに貧しいが、共通しているのは貧しくても子どもさん。その子どもたちの目は輝いて見える。そして核家族化されていない大家族なのだ。

それ比べて今の日本は少子化が進み、核家族が目立つ。会長のカンガス神父は「参加した人の多くは価値観が変わる。自分たちが当たり前と思っていることが当たり前でない。こ



週に一度の給食を食べる子どもたち

2009.07.21



2009.07.24

歓迎のハスの花を  
プレゼントしてくれる園児たち

と、今の日本で体験できないものを体験するからだ」と話し、特に若い人たちに参加を呼びかける。

心貧しい」と言っていました。（中略）私はあることに気づきました。本当の貧しさとは何かと。確かにカンボジアは貧しい。でも日本と比べてカンボジアの方が貧しいとは言えないと思えました。私たちは今、こうして生活していることを当たり前のように考えているけどそうではないと、カンボジアを訪問して思いました」

百人を超える子どもたちが裸足で土間に座り、目を輝かせて食べる姿は壮観で、貧しくとも力強い生きる力、輝きを感じた。幼稚園では園児たちからハスの花をプレゼントされた。目を輝かせ、私たちが本当に待っていてくれたことが伝わってくる。

「ある貧しい村で小学校高学年の女の子から『日本人は幸せなのか』と聞かれました。私は瞬間的に『NO!』と答え、気づかないうちに『私たちは

「ある貧しい村で小学校高学年の女の子から『日本人は幸せなのか』と聞かれました。私は瞬間的に『NO!』と答え、気づかないうちに『私たちは

ふと「神の中にある豊かさ」という言葉が浮かんだ。富、名譽、地位に関係のない価値観を共にしていることへの喜びを実感した。（元山口放送取締役ラジオ局長）